

第3回熊本市動植物園マスタープラン推進会議議事録【要旨】

日時:令和6年(2024年)2月22日(木) 9:30~10:48

場所:熊本市動植物園いきもの学習センターレクチャールーム

議 事

- ・熊本市動植物園コレクションプランについて
- ・サバンナエリア整備について
- ・新イヌワシ・ムササビ・ツル舎整備について

《委員(出席者)》4名(3名欠席)※役職順、五十音順

- ・副島副会長(熊本大学)・伊藤委員(東海大学)
- ・太田委員(市民公募)・村上委員(株式会社ヒトコト社)
- ・佐藤会長(神戸どうぶつ王国)※欠席 ・飯村委員(熊本県立大学)※欠席
- ・清家委員(公認会計士)※欠席

《事務局》

- ・藤田部長(観光交流部)・外山園長(動植物園)
- ・本田副園長(動植物園)・松本副園長(動植物園)

議事録(要旨)

○熊本市動植物園コレクションプランについて

<村上委員>

子供たちが見ることが大事。一生懸命読まないといけない作りになっていて、難しい言葉が使われている。かなり興味がある人じゃないと読まない気がする。これがさらに簡単になったものを、作成する予定はありますか。

<事務局>

現時点では、概要版がある程度まとめたものになるが、子どもたちが読めるわかりやすいものも必要になってくると思うので検討したい。

<伊藤委員>

植物の方は伝統種、地域固有種と伝統園芸種に分かれているのに、動物の方が園芸に対する家畜種とかに分かれていないのはなぜですか。

<事務局>

動物に関しては、そこを分けずとも、5つの分類ですべて包含されますので、伝統性が高い肥後五鶏や、

赤牛などに関しては教育の分野で点数が高くなります。植物の方はそこを特化して伝統園芸種という形にしております。

<伊藤委員>

域内保全にしても、域外保全にしても、アフリカその他の動物と九州、日本の動物とで分けた方がわかりやすいのではないかと。家畜種に関しても。そのあたりのマーキングがあるとわかりやすいと思う。

<事務局>

海外の種を保存していくことと、地域の種、国内の種を保全していくことは意味合いが違います。ただし保全の必要なものは、スコアリングで高くなりますのでしっかり推進種に入れて保存していくことが必要です。伝統園芸種に関しても、基本的には必要性が高いものは、スコアリング上高くなるような仕組みになっています。

<伊藤委員>

なぜ赤牛が熊本なのか、肥後五鶏は、資料館1つ分くらい伝統的な地域の動物に関しての説明があっていると思います。家畜という特殊性を知ることができるような教育があるといいと思いました。

<事務局>

地域の動物園として重要な使命ですので、強化していく必要があります。

<太田委員>

コレクションプランを作成した後の話になりますが、推進種や検討種をいつ頃導入していくのか、進捗の見える化は考えていますか。

<事務局>

しっかり年度計画を立て、繁殖に結びつくような導入をいつ行うか、それがどう国内の保全に寄与していくのか、外向けに発信していくことが大事だと思っておりますので、太田委員が言われたようにしっかり、やっていきたいと思っています。

<副島副会長>

植物の方の対象種で、キタミソウとか、江津湖に所縁のある植物だと思いますが、種類だけ挙げるのではなく、生態系といった視点が少しほしいと思います。特に水草関係は、環境があつてこそということもあり、生態系について具体的にどういうことをされるのかが読み取れないと思います。今後も検討をお願いしたいと思います。

<事務局>

ご指摘いただいた部分については、説明がまだ足りていないと私も思っております。生態系についてもっとわかりやすい展示や掲示のやり方ができればと考えております。

○サバンナエリア整備について

<副島副会長>

非常に魅力的な計画だと思います。江津湖との連続性があると思いますが、動物のし尿が江津湖に流入してしまうのではないかと心配しています。

<事務局>

自然と同じように池の中に流れ込むような作りにはしておりません。サバンナエリアがあってその先に池がありますが、先は繋がっておりません。手前にある飲み水に使えるような水場、遊べる水場は人工的に作ったものになります。この排水は下水道に繋がるようになっています。排水管理などは、ちゃんとできるように設計を進めています。

<伊藤委員>

設計の段階で公園の専門家ではなく、動物の専門家も入れていただきたい。完成して、動物の福祉どうですかと、評価してくださいと言われても、手遅れになることがあります。来年1年間は肝だと思うので、その段階でキリンやシマウマなど、調査した経験のある研究者を入れた方がいいと思います。

<事務局>

工事、設計に関しても、専門家との協議の場は入れております。東海大学との協定もありますので、そういったところも活用しならしっかり意見を入れたうえでやって行きたいと思います。

<伊藤委員>

専門家の紹介はできると思います。見た目はすごく美しいけど、動物の行動に配慮がなかったりする。それは設計の段階でいろんなことが抜け落ちた結果だと考えます。そのあたりはご配慮いただきたいと思います。もう1つキリン舎の所に調査研究スペースを確保と書いてあるのは、今後職員が研究をするシステムが出来上がると考えてもよろしいのか。

<事務局>

それを目指しているというところでご理解いただければと思います。研究に関しては進めていく方向一択だと思っていますので、スピードは遅いかもしれませんが、人材等見ながら進めていくための部屋としてとらえていただければと思います。

<伊藤委員>

ライオン舎が空くと思いますが、ライオン舎跡はどうしますか。トラは古いトラ舎のままですか。それとユキヒョウが亡くなって、獣舎が空いていますが新しい動物を入れるのではなく、今いる動物の福祉レベルを上げるような取り組み、活用ができたらと思います。

<事務局>

次年度からマスタープランの中間見直しを行っていきます。その先10年を見据えて見直しを行い、アジアの動物たち、アジアのゾーンがどういう風になるのか、どのような獣舎が必要か考えて次の10年に繋げていくことになると思います。ユキヒョウ舎に関しましては、既に飼育しているビントロングの繁殖相手を入れるために、同居をさせるスペースもしくは飼育をするスペースとして、活用する予定です。

<伊藤委員>

サイのスペースがかなり狭いので広げてもらいたい。シマウマのスペースと合わせるくらいでちょうどいい。サイを広くすれば2頭のミーティングも上手くいくと思う。できれば検討いただきたい。

<事務局>

参考にさせていただきます。

<太田委員>

この整備が終わった後は、既存の水辺と島のエリアは近くで見る事はできなくなりますか。裏側から見るような形ですか。

<事務局>

今、島で展示している動物については引き続き見ることができます。回りながら見て、反対側の方から見るようになるかと思います。サバンナを通じて島を見るような感じになります。

<太田>

今年度の基本設計でおおよその予算感は年度末あたりに見えてきますか。最近、建築費用が高騰しています。どれくらいの金額まで市が許してくれるのか、これを本当に実現してほしいと思っています。予算確保の見込はどうでしょうか。

<事務局>

工事予算に関しての金額の積み上げは、次年度の実施設計の段階で、詳細が見えてきます。マスタープランを作った段階で、市の財政当局へも確認をいただいています。サバンナエリアは、財政当局にもある程度認めてもらったうえで進めています。ただし、最近の建築資材の高騰は伝えていかなければならないと思います。

<村上委員>

市民の方や遊びに来る人たちへはこういったイメージをいつくらいから見せていきますか。一般の人たちを煽っていくことが大事だと思っていて、出来てからではなくて途中も含めて継続的に、ビフォー、アフターはこうなっていくというような仕掛けはありますか。

<事務局>

このイメージも基本計画段階のものです。新年度の実施設計で金額が出ます。金額が出た段階で、財政

としっかりすり合わせを行いまして、財政サイドがOKであれば工事の段階で広く公表できるかと思えます。今は、このような構想、計画を持っていますという発表はできますが、これがしっかり実現できるかどうかは、実施設計を待ってからということになります。

<村上委員>

ある程度まとまってから出すよりも、映画の予告編のように、少しずつ見せて、ワクワク感をずっと持つてほしいなと思っています。工事で隠れる期間が4年間あるのでその間も、動植物園についての魅力的な情報がビジュアル重視で出続けていると、工事中であってもワクワクが持続してよいと思います。

<事務局>

ありがとうございます。参考にさせていただきます。こういった構想があって、設計をしていることは打ち出していきたいと思っています。

<副島副会長>

熱帯雨林とか、乾燥疎開林、草原等が描かれていますが、実際にどのような植物の導入を計画しているのか。

<事務局>

植栽に関しては、現地のものを使うのは難しいというのが現状です。それに近い樹形のものを導入することになります。動物の福祉等を考えると日よけが必要になりますので、今活用できる樹木の残し方、新たな植栽の計画を次年度の実施設計で、樹種に関しても詳細に詰めていくことになるかと思っています。熱帯雨林という言葉がありましたが、これはマンドリルの獣舎内の植樹になります。生息地に近い形を植栽で作りこむことが必要になると考えています。

<伊藤委員>

サバンナエリアはものすごくインパクトがある。一方でコレクションプランにある環境保全や域外保全、野生動物保護や、動物福祉というところが見えてこない。サバンナエリアだけが独り歩きするような気がする。サバンナエリアをこのまま勢いを持って続けても、果たして来園者に何を伝えていくのか。東京ディズニーランドのジャングルクルーズと何が違うのか、生きている動物がいるのか、ロボットなのかが違うだけなのか。動物園の役割として環境保全や域外保全、野生動物保護や、動物福祉をどうやって伝えていきますか。

<事務局>

伊藤委員が言われたように何がテーマパークと違うのか、生きている動物を私たちは扱うところが全く違うところです。当園の推進種であるキリンやシロオリックス、マンドリルなどは保全の重要性もかなり高いものです。このエリアはあくまでサバンナを見せながらも、その動物たちを動植物園がどう保全していくかということを伝えるのがとても大事になります。生息環境がどうなっているのかななどを、しっかり伝えなければ伊藤委員が言われたようにただのテーマパークになってしまう危惧はあります。展示もしっかり

やって保全の実績もしっかり発信しながら学んでもらえるような箱にできればと思っております。

<伊藤委員>

ビジョンは分かります。それをどう伝えていくのかを来年の実施設計と同時に動かす必要があると思います。箱の設計を1年間やってどう伝えるのかということの後でやるのではなく、伝え方も同時に進めていく必要があると思います。2024年が一番大事になると思います。何をどうやって伝えるのか、ソフト的なものも含めて1年間で検討しながらやって、それを発信していくことが大切だと思います。

<事務局>

環境保全や域外保全、野生動物保護や、動物福祉についてを伝えるための仕組みがないまま設計が進んでいいかのように、その点も踏まえながらやっていきたいと思っています。

<村上委員>

入口は、華やかで、キャッチーでいいと思います。見終わったら何か学びがあるような。勉強のためだけのものを掲示物にしても、一生懸命読まないといけないものでは、やっぱり読んでくれないので。出たときに何かを学んで、それを誰かに伝えたいくなるような伝え方がきっとあると思います。もし、お手伝いできれば私もお手伝いします。

<事務局>

ぜひ、お手伝いいただきたいですし、私たちも学んでいきたいと思っています。

○新イヌワシ・ムササビ・ツル舎整備について

<太田委員>

イヌワシの巣を監視するカメラ設置していますが、来園者が展示ブースからリアルタイムで見ることができるようにすることはできませんか。

<事務局>

展示ブース近くにモニターを設置する予定にしています。見せ方としては今後、検討していきます。

<伊藤委員>

イヌワシの繁殖に関して、日動水の方から情報があると思いますが、どういう情報を集めて、だれが何をするのか。繁殖がより進むような飼育のためにどこから、こういった情報を求めるのか。

<事務局>

多くの繁殖実績がある園があり、日本動物園水族館協会が情報を蓄積していると思われます。飼育下での繁殖技術というのは、かなりの年数培われていて、我々が参考にするのはそういった実績のあるところになります。そして、うまくいかない場合はどうするのかと検討する場もありますので、そういったところに相談させていただくことになります。

<伊藤委員>

最終的に何を目的にしているのか、繁殖させて放鳥までもっていくということでよろしいですか。

<事務局>

それは、保護増殖事業の中で考えられています。ただ、遺伝性の問題とかがまだありますので放鳥までは至っていないのが現状です。前回の会議でライチョウの放鳥の話がありましたが、イヌワシに関してもそれを目指しているところです。血統の確保というところで先ほど言った野生下の卵を使って、さらに何世代か進めば放鳥に繋がってくるのではないかと思います。

<伊藤委員>

ツルの所に高さを設けて動物福祉に配慮するとありますが、高さ以外のことも配慮をお願いしたい。福祉はもちろん段階を踏むものなので、高さも配慮することの一つですが、もう少し進めていきたいところです。ストレスレベルが下がると繁殖機会が圧倒的に上がります。逆に言うとコルチゾールとかストレスホルモンが出ている状態では繁殖は止まってしまいます。できるかぎりストレスレベルを下げるような工夫をしていくことが繁殖につながります。最後に故郷の自然のゾーンについて今後の計画はどうなりますか。

<事務局>

このゾーン自体は 4年前に立てた段階の実現可能性と、国内の状況が今は変わっております。よし池をこういう風にしたいということも、ふるさとの自然の中のひとつなのでそういう所も含めて再度ブラッシュアップできればと思います。

<村上委員>

動物たちの説明を事務局から聞いて、それぞれの物語が面白いなと思いました。私たちだけではなく、一般の方がそれを知るともっと動植物園に愛着がわくと思います。

<事務局>

そういった取り組みは、国と動物園が協力してやっている取り組みです。必要性も非常に高くなっており、他の動物園ではそういうことを行っているところもあります。わかりやすい掲示や展示の方法、ガイドの仕方を進めていかなければいけないと思います。

<副島副会長>

イヌワシが熊本で見られなくなった理由として、植林の増大とありますが、1995年くらいに阿蘇で見られたということは、拡大造林をしていた時代とは少しずれるのではないかと思います。絶滅の原因、理由というのが別にあるのではないかとということが気になりました。

<事務局>

難しいところではあるかと思いますが。すべての原因が植林ではないとは思いますが。ただ、生存環境がそれによって圧迫されたことも一つの原因と思われます。阿蘇が優れているのは、草地のある見通しの良い場所ということで、それがイヌワシには必要です。それとそこにいるエサですね、実際にはエサになる動物が減少しているということも一つの要因になるかと思いますが。複合的な要因が重なって減少したということとは想像されます。

<太田委員>

冬場の鳥インフルエンザの対策で、新イヌワシ舎や新ツル舎も見ることができない時期がありますか。

<事務局>

金網の大きさなど、鳥インフルエンザに対応できるように設計していますので、基本的にはそのまま展示ということになるかと思いますが。ただ、周りの発生状況によって危険性が高いと判断したときには、何らかの対策を取ることになります。